
東方仙人伝

滓魔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方仙人伝

【Nコード】

N8782X

【作者名】

滓魔

【あらすじ】

なぜか目が覚めたら森の中だった。

これはいつのまにかチートになっていた主人公が東方の世界で奮戦するひとつの物語です。

これは妄想でできている部分もあります。

く程度の能力と南斗聖拳（前書き）

なんだか妄想が抑えられずに書いてしまいました。

なんだか今かかなければいつ書くんかという気になってしまいました
て…

自分はテンションが高くなるとたまにおかしなことをかくのでご了承
承ください。

く程度の能力と南斗聖拳

ああー東方いいよ東方

てか…常識外れもいいとこだな…

はあくいききたいなー死んでもいいから行きたい…

さて寝よう…

うーむ…眠れん

学校とかでは十秒くらいで眠気が襲ってくるのに…
なぜか家では一時間以上眠くならないんだよな…

…眠く…

「よく寝た、よく寝た」

「うん？」

そこで俺はおかしいことに気がついた。

なんだか体が軽いような…というかそれ以前に寝ていた場所がおか

しい。
どこだこは

辺り一面、木、木、木、木…木しかない。
つまり森ということだが…俺は家の布団で寝たのであってこんなところで寝た覚えはない。

というか夢遊病？それとも俺の厨二病が悪化したか？

いやそのまえにこれはそもそも現実なのか？

現実に近い夢なら何度も見たことがある。

今回もその可能性が高いな…

三十分ほどその場で座ってゆっくりと考え景色を眺めていたら俺は自分の名前さえ思い出せなくなっていた。
どういうことだ？

俺はたしかに忘れっぽいしのんびりで厨二だけどさすがに自分の名前を忘れるほど物忘れが激しいわけがない。ましてや俺はまだ十五歳だ。

そんな年でもない。

しかたがないので適当にのんびりと歩くことにした。

俺のこの時の考えは真っ直ぐ歩いていけばいつか出られるだろうという楽観的な考えだった。

しかし現実是非常である。

木以外に見つかったものといえば洞穴と滝と谷だけだった。

…いくらなんでもおかしい。

すると俺の頭の中にこんな言葉が浮かんできた。

忘れる程度の能力… 眠る程度の能力…

「…」

思わず俺は茫然としたまさか、自分の厨二病が自動的に能力名を考
え記憶を失い妙な夢を見てしまうほどに進行していたなんて…

そう思っていた時期が俺にもありました。

だが適当に思いついた妄想をしていたらなんと森の中からでられた
のだ。

ヒヤッハー！外だー！

そして、俺は喉が渴いたので嫌々ながら近くにあった水場で水を飲
むことにした。

このとき俺は気づいてはいけないことに気づいてしまった。
なぜか俺の顔がアニメ風になっていたのだ。

「…こりゃまじめに考えないと…いや…なるようになるだろう」

俺はどちらかというところの中で考えてあまり口にはださないタイプだ。

それに俺はいつも運頼みで何事もなるようにしかならないと考えている。

困った時の神頼みってな。

そして俺は適当に神頼みで矢印を四方向に書き選ぶことにした。

「どれにしようかな、天の神様の言うとおり！」

俺が選ぶことになったのは森を抜けてちょうど右の方向だった。

ふう…しっかしなんだかなあ…なんだかこう東方に来たら来たで嬉しんだけど…

目的をまた一つ達成したって感じで虚無感というか虚しいというか…が襲ってくるんだよねえ

さーて進路が決まったのはいいが問題はこの能力の使い道だ。

眠る程度の能力はまだ使い道がある。

夜に寝たいときに便利だ。

が、問題はもう一つの忘れる程度の能力だ。

進化でもしてせめて対象を俺じゃなくて他人にしてほしいもんだ。

このままじゃ本当に何もかも忘れることになる。

うーん…ところでここはどこで今は何年なんだろうか…

これが分からなければまるでお話にならないからな…

はあ…もういいや森に戻ろう…

やっぱりこういうときは一番最初にいたところから動かないのが一番だよな

適当に途中にあった洞窟にでも住むかな
ところで洞窟の場所…覚えてないんだが？

どうしてこうなったと言うしかないな
そういえばこういうのってほとんどは妖怪になってたりかなり大昔
だったりそのまんま幻想入りてきな展開だよな…

俺の場合はどうなんだろうか…
なんだか直感的に大昔な気がしてきた。
だって色々と環境がおかしいし…

うーんそういえば最後に見たアニメは北斗の拳だったな…
しかし南斗も北斗もチートすぎだろ。
こうしゅぱっと

シュッ

スー

ポトツ

「これがリアルボトリ！」

つて…ちょっとまって

今何が起きた…

俺は賢くはないし馬鹿の中の馬鹿だがこういうときは冷静になるのが重要だったはずだ

…まず整理しよう俺は北斗と南斗はチートすぎだと思った 南斗のイメージ通りに手を横に振った 木が切れて地面に落ちた…

俺も人間卒業か

いや…まてよ…冷静に考えたらこれはこれで…

しかもその気になれば「お前はもう死んでいる」ができるじゃないか!?

あ…だめだ…忘れた…

ナントコツタイ…

こうなったら八つ当たりしかないな…

「ふんツ！」

俺は思いっきりちょうど横にあった木に腕を振った
すると木は面白いように壊れて吹き飛んで行った。

〈数時間後〉

これはひどいw
もう色々と滅茶苦茶になっていた。
すっかり忘れていたが俺の恰好は自転車や車の書かれた子供っぽい
パジャマだ。

いやおかしいということとは自覚してる…こんな年にもなって…ってな
だが仕方ないだろう。
家に碌なものが置いていなかったのだ…

ふう…これからは南斗を鍛えていくかな…

だって北斗とかいちいち覚えてねーし

覚えたとしてもどうせ忘れるし…

はあ…

「南斗獄屠拳！」

スタツ…

決まった…

ハッ！

いかんいかんこういづので慢心したらいかん！

だいたい東方の住民はみんなとんでもない化け物だったはず…

これからゆつくりと力をつけていくしかないな…

南斗を再現することにも今のところは一部だが成功しているし南斗孤鷲拳の再現は一通り終わった。

他の南斗の技はためしてないけどな…

これからの予定はこうだ。

まずは南斗の技を体に覚えこませ、これでもかというくらいにか
く技を使いまくる。

そして何度か同じことを繰り返してこの森をでるといふもの
でなければたちまち全てを忘れることになるだろう。

そうなってもせめて最低限戦えるようにはしておきたいのだ。
くそうこれも全て能力のせいだー！

眠くなってきた…

お休みなさい…

く程度の能力と南斗聖拳（後書き）

どうでしたでしょうか？

少しくらいハンデがないと主人公が最強なだけの話になってしまい
そうだったので…

カこそ正義！良い時代になったものだ（前書き）

キングダムゾン！

力こそ正義！良い時代になったものだ

あれからどれだけの時間がたったのか…

今日はそろそろ外を本格的に探索しようと思う。

あと南斗聖拳は南斗水鳥拳と南斗孤鷲拳をいつでも繰り出せるくらい修行した。

俺にはそもそも才能がないのでかなり時間がかかったのだ。能力の妨害もあったがなんとか維持することに成功している。早くこの呪縛から解き放たれたいものだ…

というより最近疑問に思っているのは俺の種族だ。

こういう場合かなりの高確率で妖怪なんだが…

確実に妖怪だ！って言えるくらいの自信は、はっきり言ってない。

体に覚えこませれば記憶にしか能力の影響がないのであればだいたいの技をなんとなく思い出すことができる。

というより体が勝手に動くくらいやったからな…

外を探索するうえでの問題点は人がいるかどうか…ということと帰り道を覚えていられるかだが…

帰り道のほうは簡単に解決した。

適当に周囲に切り傷をつけていくことにしたのだ。

それにしてもこの森は…再生力が凄まじいな。
なんせ1週間ほど前に切った木がすでに完全に再生しているのだ。

今回はすんなりと出られたな。

うん？

俺が前方に目を凝らすとかすかに煙が空に昇って行くのが見えた。
もしかするともしかするかもしれない…

なんだか小腹が減ったな…

俺は近くにあった川で魚をとって朝食をとることにした。
途中で熊に襲われたが瞬時に切り裂き朝食のたしにした。

うーんおいしいねえ…

平和っていいね。

さて改めて出発するかな。

〈数時間後〉

道中で色々あったがたいしたことではなかった。

それより問題は人の住んでいる集落のようなものが目の前にあることだ。

そこではお祭り騒ぎでごちそうや見たこともない飲み物が大量にあった。

…じゅるり

ハッ!?

いつのまにかよだれがでていた。

…まだまだ修行が足りないな。

だが周囲を探ると何人かがこちらの様子を窺っていた。

「…」

「「動くな!」「」

「だが断る!」

ネタでいつものように断ってしまった。

するといきなり手に持っていた槍のようなものを持って突進してきた。

猪じゃあるまいし…

「南斗飛燕斬!」

すると当たり前だがあっという間に全滅した。

「ふん」

そして俺は振り向きざまに飛んできた矢を避けると一瞬で間合いを

つめ手刀で貫いた。

どうやら俺は歓迎されていないらしい。

まあ、いきなり現れて抵抗するのも悪いとは思うがやはり俺の中では力こそ正義！である。

所詮この世は弱肉強食なのだ。

とりあえずあの村は観察することにした。

なので近くに洞窟がないか捜した結果かなりいいところにあつた。

そこは木で囲まれてはいるが少し歩けばすぐに集落を見ることができるところまでいける。

つまりあちら側からは見えないということだ。

〈観察〉

一日目：騒がしかった。おそらくさっきの奴らが帰ってこないのが原因だろう。

二日目：何人かが集落からでた。行方不明者を探しているのだろうか。

三日目：特に変化なし。

四日目：数人がこの洞窟の周辺に近付いてきたので始末した。

五日目：特に変わったことはない。

六日目：集落からでた何人が戻ってきたようだ。

七日目：集落にいた子供以外の奴らは全員が集落の中央にある大きな建物に朝早くから集合していた。集会所のようなものなのだろうか。今は昼ごろだがなかなかでてこない。夜中になってようやく解散したようだ。話の内容はおそらく俺に関することだろう。

キングクリムゾン！

あれから一カ月ほど経つがどこに貯蔵していたのか誰も村からでていない。

しょうがないのでしばらく放置することにした。

キンクリ！

あれからはもう数えていないので今はどれだけ時間が経っているのかはわからない。

だが変化があった。

まずあきらかに人ではないものが集落に侵入していた。

そのせいでパニック状態だったようだ、それが何回か続くと次第に柵が高くなったり武装している奴が増えた。

今日は俺もどさくさに紛れて侵入することにした。

「うわぁー妖怪だー！妖怪がでたぞー！」
高台にいた男はすぐ横にぶらさがっている警報代わりのよく響く板を棒で叩いていた。
すると妖怪が三匹ほどいた。

特徴は角があった。これがもっともわかりやすい特徴だった。
そのなかの一匹が俺に気づいて走ってお近寄ってきたかと思ったらいきなり吠えた。
普通の人間ならひるむだろうが…ビビって逃げていくとでも思っているのか？

俺がしばらくそうやって見ているとなにやら焦った様子で殴るふりをしてきた。
よく他の二匹の妖怪も見ると建物や食物に被害がでるだけで人間には勝手にころんでるやつくらいしか怪我人はいない。

俺は面倒だったので頭を軽く殴った。
すると吹き飛んでいき木でできた壁に頭から埋まった。
他の二匹はそれを見るなり急いで吹き飛んだ奴を壁から引き抜き俺を警戒するように睨んだ。

「ふははははは！」

いきなり笑いだした俺を一瞬怯えたような眼で見たがすぐに元に戻った。

俺は目の前に一瞬で移動した。

普通の人間には俺が瞬間移動したように見えるかもしれない。

妖怪のほうは目を見開いて慌てて逃げようとしたが時すでに遅し。

「南斗飛燕斬！」

三匹は宙を舞い地面にそのまま落ちた。

一匹だけは意識を失っていなかったようでも呻いていたが俺はそいつの頭を踏み台にして片足で押さえつけると集落の奴らは少しの間静かだったがいきなり

「うおおおおおおおおお！！！！」

と歓声をあげた。

やはりこの時代は力こそ正義だな。

すると一人の老人が「もしよろしければ……」と言ってきた。

「まずは食糧と水だ」

「かしこまりました」

そのまま老人は近くにいた奴に話しかけると食料と水を持ってこさ

せた。

…少ないな。

「…」

「こ、これだけしかありません。どうかご勘弁を…」

俺の気配でなんとなく察したらしくそう言ってきた。

「まだだ。まだ足りぬ。もっともってこい。それも一つや二つではない…全部だ！」

「それはいくらなんでも…」

「なあにいゝ？この俺に逆らおうというのか？」

「めっそもございませぬ！ただそんなことをしてしまつと我々の明日が…」

「貴様らのことなど知ったことではないわ！」

「…それとも死にたいか？」

「ひ、ひいつ！」

「す…すぐに取ってこさせます！」

と言ってすぐに走ってどこかに行ってしまった。

「力こそ正義！良い時代になったものだ」

結局あのあと食糧や水を全て提供（笑）してもらった。

そして今は妖怪の処刑がおこなわれるところだ。

どうやら何度も来ていたようで公開処刑されるようだ。

妖怪たちは泣きながら命乞いをしていた。

よくよく見ればなかなか綺麗な子供の鬼で将来は美人になるだろう。

するとその鬼が

「何でもしますから誰か助けてください！！」

と集落中に響き渡るほどの大声で叫んだ。

俺はその子鬼達のところに歩いて行った。

誰もが俺を畏れた様子で見えていて俺が歩く道を開けた。

「おい鬼。今の言葉、間違いないだろうな？」

「は、はいい…な、何でもしますから助けてください…」

と非常に小さい声で言った。

「なあにいく？聞こえんなあ！」

「あなたの言うことを何でも聞きますから助けてください！」

そう言った。

「ふはははは！よかろう。助けてやる。」

「ふ、ふざけるな！村の食料を奪ったくせに今度は妖怪の味方かよー！」

「貴様ら…この俺に逆らうか！」

俺が一番近くにいたやつ胸を貫くとそのまま空中に飛び上がり南

斗飛燕斬を放ち一掃した。

そうしてこの村は滅んだ。

力こそ正義！良い時代になったものだ（後書き）

少し疲れたので前半と後半に分けます。

木人形(デク)(前書き)

投下します

木人形（デク）

さうて邪魔なやつらも始末したことだしそろそろこいつらと話してみるか…

「おい」

「は、はい…」

しばらく何か考えていたようなので話しかけてみると何かを言おうとしている。
何だろうか…

「わ、私の名前は…」

「貴様の名前などどうでもいい」

「それよりもさっきの話だが…偽りはないだろうか？」

「はい、ありません」

「ククク…そうか…では、さっそく洞窟に戻るとするか…」

ククク…いい木人形が手に入った…

こいつら妖怪は人間と比べて高い生命力を持っているからな。

特に鬼は生命力が強く肉体も頑丈だ。

しばらくは俺の実験にも耐えるだろう。

く洞窟（自宅）く

さてついたか…

「おい、その二匹」

そういうと睨んできたが

「何だその目は！」

と怒鳴るとすぐにおとなしくなった。

なんだか俺が一方的に虐めてるみたいだな…

「私たちでしょうか…」

「ああ、お前達だ。その二匹を抑えておけ」

「…絶対に離すなよ？」

「お前はその上に寝ている」

そうなのだ。俺はこんなこともあるつかと岩を削って台を作っていたのだ。

なぜこんなことをするかというと既に気づいているだろうが…アミバのやっていたように秘孔を発見すべく準備しておいたのだ。

まあもちろん秘孔の位置なんて知らないので適当に体中を指で押していくことになるのだが…

かなり残酷だな…今更だが…まあ、これも生きるためだ。

「な、何を…」

「なあに秘孔の位置を探るだけだ。かなりの苦痛をともなうが…我慢しろ」

「そ、そんな」

「お前達はこう言ったはずだな…助けてくれたら何でもします。と」

「お前達は仮にも鬼だろう。鬼は嘘をつかぬと聞いていたが…」

「嘘はつきません！」
こんなときだけ大声をだすもんなあ…
ていうか何で敬語なんだ？
まあ、いいか。

「では行くぞ…ハア！」

ズブ…ズブ…ズズズ…

「ガ…アアア…ク…ア」

必死に耐えているようだ。
そんな様子を見てるとなんだか顔が緩んできた。
まあ、つまりはニヤついているということだ。
俺は元々Sよりなんだ。
今ので変なシーンを想像した奴は…
まあいい。

「お？」

なんだかいけそうな気がしてきた。
成功すれば…ククク…
押さえつけている二匹の方を見ると目をつぶっている。
口の間からは血が流れていた。
随分と仲間思いだな…

俺なら笑いながら喜んで押さえつけるぞ

「ぎゃあああああ」

「ん？間違ったかな」

俺が首をかしげていると気絶したようだ。

それにしても気絶するだけか…なんだかそんなことをできそうな秘孔があった気がするが…まあそのうちわかるだろう。

「ふむ…」

「うつうつ…」

横を見ると二匹とも泣いていた。

ふん、五月蠅い奴らだな。

「泣くなら外で泣け。五月蠅いからな」
俺がそういうと二匹とも外に行った。

まったく…

〈数十年後〉

最近は順調に秘孔を探ることができている。

最近だけでもこの数十年では秘孔らしきものがいくつも見つかった
いる。

効果はだいたいわかっている。

忘れてもいいようにメモをとっているからな。

鬼達に見せてやると首をかしげていた。

まあ、見せてもこいつらでは真似すらできんだろつ。

「ぎゃあああああー！」

「助けてくれえええええ！」

今はいくつもの悲鳴が飛び交っている。

何をしているかというところ最近になって数を増やした妖怪を捕獲して
秘孔を探っているのだ。

うまくやらないと突き殺してしまうからな。

「ひでぶー！」

「うすらばー！」

「わかめー！」

なんだかさつきから変な断末魔が聞こえてくるが気のせいだろう。

秘孔に名前はつけていない。

そんなことしたら覚えるのが面倒だからな。

あの鬼達は今も生きている。

まったく運のいい奴らだ。

何度も突かれているのにかかわらずしぶとく生き延びている。

あと言い忘れていたが最近になって急激に発展している街を見つけた。

あきらかに場違いである。

一度妖怪の軍団を差し向けたが黒こげにされていた。

ビームやレーザーの類だろう。

他にも銃弾のようなものもあった。

まったくどうなっているのやら…

その街は最初に見かけたときは小さな原始的な集落だったが、数年もすると江戸時代風になり最近ではまさに未来都市！とでも言うのだろうか…そんなふうになっていた。

なんだか見えない壁もあったしな。触れた瞬間妖怪が消滅していた。

妖怪たちもこの事態にさすがに危機感を抱いているらしく活動が活発になってきている。

このままいけば妖怪と人間との戦争になりかねん。

あと言っていなかったが北斗剛掌波を使えるようになった。

「ぼ、ボスケテー」

「お前はもう死んでいる」

「べ、べらぼあぁー！」

〜数日後〜

なんだか最近ではとある山にて妖怪達の集会が開かれているらしい。なぜ知っているのかというとあの三匹の鬼が夜になるとこそそと出かけているのだ。

あの鬼達も最近では反抗的になっている。

だいぶ前に妖怪なのか？と聞かれたときに俺はこう答えた

「いいや、俺は人間だ」

すると

「……お前のような人間がいるか！」「……と三匹に同時言われた。

「……だってあれから何十年もたっているのに年をとっていないじゃないか！」

あれから何十年もたっていたのか…と俺はそのときにはじめて知った。

まあ、素手で岩を砕き鋼をも斬り裂くような奴が人間だと言っても俺も信じないがな。

「新秘孔の究明だー!!」

「「「ぎゃあああああああああああああああああああ!!」

「「「「」

木人形（デク）（後書き）

どうでしたでしょうか？

八意永琳（前書き）

投下します

八意永琳

どうしてこうなった…

俺は今、未来都市の前にいる。

なぜか？それはまあ…その…なんだ
妖怪たちが誰が偵察に行くかということと話し合ってるところに偶然、遭遇してしまいくじ引きできめよう！
というわけのわからない展開になり不運にも俺が選ばれてしまったのだ。

「はあ…」

「きゃー」

「うん？」

何かと見ると崖から落ちそうになっている珍妙な服を着た少女がいた。

どこかで見たような…見てないような…

周りを見ても誰もいない。
このまま帰ろうと思ったときにふと思った。

もしここで助けてやれば…

俺が助ける 感謝される 都市に入れるかも…

なんてことになったりして…

とりあえず助けてやるか

「おい小娘」

「…なにかしら」

うわーなんだコイツ…今にも崖から落ちそうになっているのにかなり偉そうだぞ…

殺してやるうか…

そんなことしたら面倒なことになりかねんからやらんがな

「助けてほしいか？」

まあいいか…
激流に身を任せ同化する。激流を制するは静水ってどこかで聞いた
しな…

なるようになるだろう…

「へいへい」

「もう一度質問するわ。あなたは何者かしら」

「ただの人間ですがなにか？」

「…あなた自分の立場がわかってるのかしら」

「ぱんつを見せる」

「この者を牢に入れておきなさい」

「はっ！」

（数十分後）

ククク…計画通り！

あの状況であんな変態発言をすればおそらくこうなるだろうと予想してあえて言ったんだよ！

「ふはははははは！」

「うるさいぞ！黙れ！」

「それにしてもお前、よくあんな命知らずなことが言えたな」

「ヒヤッハー！水と食料だー！」

「お前…よくそんなまずい飯が食えるな…」

「黙れ！飯がまずくなる！」

「…元々まずいだろ…」

「二度も同じことをいわせるな！」

「あー！うるさい！黙れ！そんなに大声をださなくても聞こえてるからやめろ！耳がおかしくなりそうだ！」

「お前も馬鹿なやつだなー」

「なぜだ？」

「永琳様はな人間を使って実験をしているんだよ」

「ほう…」

良いことを聞いた

まさかあの小娘が俺の同志だったとは…

「じゃあ俺もその実験台にされるのか？」

「ああ、間違いない。この都市で牢屋に入れられたものはどこかに

連れていかれてその後の行方は誰も知らない」

「ククク…おもしろそうだな」

「お前、頭がお「おいその囚人を牢屋からだせ」…はい！今すぐに！」

何人かの黒いスーツに身を包んだ男が現れた。

こいつらが俺を親切にも案内してくれるやからは…

すると看守が小さい声で

「お前も運の悪い奴だな。うらむなら自分の運の無さをうらんでくれよ？」

「ふん、別にお前をうらむつもりはない」

「サラダバー」

「しっかりとついてい」

そして、目隠しをしてきた

そうして歩くこと数分…

「あら…また会ったわね」

「そういえば名前を聞いていなかったな」

「そういつときはまず自分から名乗るのが礼儀じゃないかしら？」

「知ったことではないな」

「…私の名前は八意永琳よ」

「…」

「何かいい残すことはないかしら？」

「ククク…」

「何かおかし…ぐっ!？」

「な…なに…を…」

「何をだと？」

「お前は天才か？」

「…ええ」

「なら自分でなんとかするんだな」

「くっ」

「まあ…これからお前にはいくつかの質問に答えてもらっ」

「…」

「まずこの都市に展開されている見えない壁を消すにはどうしたらいい？」

「ぐっ…く…口が、勝手に…」

「それは評議会の議員の全員の部屋にあるボタンとそこにあるボタンを押さなければ消えないわ」

「貴重な情報をありがとうございます」

俺はボタンを押すと

再び秘孔を突き突いた瞬間の記憶を消した。もちろん気絶している。

〈評議員の部屋〉

「おじゃましてます」

「だ…ふっ！？」

「さうてボタンはどこにあるんだ？」

「そ…そこに…ふべらば…」

そうしていくつかの部屋にいった。

目的も達成したしさとさと帰るか…

八意永琳（後書き）

今回はここで終わりです

仙人の目と仙人の肉体の両方が備わってて最強に見える(前書き)

投下します

仙人の目と仙人の肉体の両方が備わって最強に見える

はあ…

「き…きろ…ろ…お…ろ…おきろー！！！」

「うおおおおおー!？」

「やっと起きたのか」

「うん？なんだお前か」

無理やり起こされたのでまだぼんやりとだが反抗的になった三匹のうちの一匹がそこにはいた。
まったく…こんな朝早くから何だというんだ…

「人間がまた領土を広げている」

「そんなことで俺を起こしたのか…」

洞窟の外を見るとまだ霧がかかっていて薄暗かった。

「こんなこととはなんだ！人間と妖怪とで戦争になるかもしれないんだぞ！」

たしか妖怪の中で唯一人間は危険だとはっきり認識していたのはこいつだったな…

他の妖怪はどうせ人間なんてたいしたことがないと思っているようだが…

人間ほど恐ろしいものも少ないだろう。

とくに無駄に科学技術の発達した人間ほど怖いものはない。

「で？俺にどうしろと言うんだ」

「言っておくが俺にはそんな力はない」

「ふん。何がないだ。周囲一体の妖怪たちを拳で屈服させたのはお前だろう！」

「いや…あれは成り行きと言っか…」

「とにかく！お前には責任をとってもらうからな！」

「ふ、不幸だ…」

行ったか…

それにしても最近は不幸の連続だ…

妖怪たちと大乱闘したり鬼に顔面をぶん殴られたり…

空から爆弾が雨あられと降ってきたり…

ミサイルが洞窟に撃ちこまれたり…

山火事が起きたり…

洪水になったり…

雷にうたれたり…

考えれば考えるほど不幸な出来事が…

「はあ…」

さっそく眠るか…

おやすみなさい…

〈数時間後〉

「今何時だ」

「昼だ」

「そうか…昼か…」

そろそろ外にでて日の光を浴びるか…

「やっぱり起きたばかりの背伸びは最高だねえ」

ひゅー—————

ぱんっ

するといきなり目の前が真っ暗に…なんだか頭に覆いかぶさっているような…

「！？」

「なんぞ？」

よく見ると服のようだった。言い忘れていたが俺の今の恰好は布を無理やりつなげたようなボロだ。

「…」

そして、それは黒地に赤雲の模様が描かれた外套のようなものと笠の装束だった。

「な…なんじゃこりゃー！」

なぜかすでに俺に着せられていた。

ボロはどこにいったのだろうか…

するとひとつの手紙のようなものがあった。
開けてみるとそこには

「信仰してくれてありがとう」

と一言だけ書かれていた。

もしかしなくても神様からの贈り物？

「ヒヤッハー！贈り物だー！」

「な、なんだ！？」

ぞわ…ぞわ…

「お前…どうしたんだ？その格好それにその眼は…」

「？」

すると手鏡を渡されたので見てみると俺の眼は…輪廻眼になっていた。

そして…気づいたことが他にも一つある。

能力が両方とも消えてなくなっているということだ。

「…」

つまりは

もう能力のせいで記憶喪失になることがない！！！！

「ヒヤッハー神様最高ー！」

「うん？」

周りを見てみると

妖怪たちが集まっていて俺をポカーンとした様子で見ていた。

「>
<>><」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「ぐぼっ!?!」

顔面と腹にパンチをもらった。

「お、俺は何も…ガクッ…」

↳ 数時間後↳

「…」

「やっと目が覚めたのかい？」

「お前は…」

「忘れちゃったのかい？私だよわ た し」

今俺と話しているこいつは河童の妖怪で医者をやっている。
ちなみにかなりの凄腕で今までに治療できなかったものはないとい

う。

「あとそんな目で私を見ないでほしいんだけどねえ…」

「おいィ？お前までそんなことを言うのか？」

「ははは！冗談だよ。冗談」

「それにしても変ったねえ…」

「何がだ？」

「あんた昔は私達をまるでゴミみたいに扱っていたじゃないか」

「そうか…」

俺は全ての記憶を思い出した。
妖怪たちへ残虐の限りを尽くした自分を…

「昔のことだと忘れてくれとは言わん」

「どつどつでも言つがいい」

「あんた何かに取りつかれてたんじゃないのかい？」

「きつとほかの奴らに今のお前さんを見せてやったらきつとダレダオマエって言われるよ？」

「…」

「穴があつたら潜りたい…」

「はあ…」

「しかし、あんたよく見たらいい男じゃないか」

「やめる」

「俺は褒められるのが嫌いなんだ」

「そつなのかい？」

「昔からな」

「そりゃ悪かったね」

「別に謝ることもない」

「それにしても最近人間も妖怪も活発だしねえ……」

「近々、戦争が起こるらしいよ?」

「まったく……くだらん」

「本当だねえ……」

「さて……俺はそろそろここから出ても良いんだよね?」

「ああ、もともとあんた怪我ひとつなかったよ?」

「助骨が折れてたくらいで」

「おいイ!?!」

「ははは!」

「まったく…」

「じゃあな」

「また何かあったらいつでも来なよ!」

「わかった!」

まったく…良い妖怪もいるじゃないか…

仙人の目と仙人の肉体の両方が備わって最強に見える（後書き）

あ…ありのまま起こったことを話すぜ！

「俺はいつものように小説を書いていたと思っただらいつのまにかこんな展開になっていた」

な…何を言っているのかわからねーと思うが俺も何をされたのかわからなかった…

頭がどうにかなりそうだった勝手に手が動いたとか無意識だとか

そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…

本当にどうしてこうなった…

下準備(前書き)

投下します

下準備

今、俺は妖怪たちと話し合っている。
もちろん人間のことにについてだ。

「で？」

「…あの後、攻め込んだ妖怪たちは全て全滅した」

「どっしてそうなった？」

「お前がちゃんとしなかったからだろう！」

これからはこいつのことを知阿鬼と呼ぶことにした。
知阿鬼は俺の胸倉をつかむとそう叫んだ。

「知らんな。俺はちゃんと役目を果たした」

「貴様ア！」

「とりあえず落ち着け。軍師のお前が我を忘れてどっする」

「くっ…」

まったく…それじゃあ俺の冒険は無駄に終わったのか…

あるときは触るな危険と堂々と壁に配置されていたボタンを押したり…

またあるときはもう二度と見たくないゲイの像の尻に議員が持っていた棒を突き刺したり…

あるときは議員がスイッチにして持ち歩いてたり…

またあるときはパスワードを制限時間内に入力しなければ爆発してしまう仕掛けを解いたり…

あるときは休まずに急いでも脱出するのに四日はかかる様々な仕掛けの施された地下ダンジョンをさまよったり…

はあ…

「…人間はまるで我々が来るのがわかっているようだった…」

「そりゃお前…議員やらなんやらが殺されまくったあげく見えない壁が無くなったのにわからねえわけねえだろ」

「しかし…」

「おーい！」

なんだ？

そう思っで見ると一人の河童がそこにはいた。

「あの都市の仕組みがわかったぞ！」

「ほう…」

「本当か！」

「ああ！本当だとも！」

「なぜ今まで気づかなかったのか不思議なくらい簡単な仕組みだった」

「それは？」

「それは…」

ゴクリ…

「それは…」

「早く言わんかい！」

「フヒヒWサーセンW」

「まったく…」

「実はもうひとつ見えない壁のようなものがあってそれが探知式で都市を囲むように展開されているんだ」

「なるほど…」

「つまりはあれか？議員を何人殺されようが壁を取り払われようが痛くもかゆくもなかったってか？」

「んー…まあ、そういうことだね。何があったかは知らないけど」
「愁傷様」

「うおおおおおおおおおお！！」

「あとついだけで例のアレ…もうできてるよ」

「おおおお！本当か！？」

「本当、本当」

「ちよつどここに持ってきてるんだ」

例のアレというのはペイン六道が持っていた黒いバールのようなものだ。

あれにはさすがの河童たちも最初は首をかしげていたがなんとなくわかったらしく作成することができた。

まあ、俺も手伝わされたけどね…

「ほれ」

「おお…」

完璧だ…あとはちゃんと効果があるかがわかれば…

「ちゃんと効果があるか試してあるから大丈夫だよ」

「何から何まですまん！」

「いや、久々に腕がなったよ。骨のある仕事をありがとう」

「これからもよろしく頼む！」

「ふふふふ…たしか大量に…だったよね？」

「そうそう悪いな」

「いや別にいいよ」

いやー本当に河童という妖怪はすごいな…

「それで…都市に侵入するにはどうしたらいいと思っつ？」

「うーむ…さてよ…ククク…」

良いことを思いついた…探知式の壁なら裏をかけるかもしれん…

「良いことを思いついたぞ」

「それはなんだ？」

「それにはな…まずは契約をしなければならぬ」

「契約？」

契約というのはもちろん口寄せをするための契約だ。
ペインたちが木の葉の里に侵入する際に使った手口でいかせてもら
う。

〈作戦説明中〉

「なるほど…」

「わかったら妖怪たちを集めてくれ」

「わかった！戦闘に参加する全ての妖怪を集めてくる！」

ちなみに当然と言えば当然ではあるが戦闘をするための妖怪と怪我や病気を治す妖怪、河童たちのように様々な道具を開発する妖怪がいる。

〈数日後〉

「ふう…」

「じゃあ契約と作戦について説明する！」

「まず契約というのは口寄せをするうえで欠かせない儀式のことだ」

「口寄せ？」

「まあ俺だけが使うことのできる忍術…と言ったらいいか…まあ簡単に言つと時間を超えて自分のいる場所に呼び寄せることができる」

「便利だなあ…」

「契約には血が必要だな」

「じゃあ採血しないとイケないのか」

〈契約中〉

「ふう…これで終わったか…」

「作戦というのは？」

一人の妖怪が聞いてきた。

「作戦と言うのはな…俺と鬼がまず都市の近くの森まで行く。そして、そこで鬼が俺を都市の中まで投げ入れそのまま俺がお前達を口寄せして都市を攻め落とすという寸法だ」

「……………おおおおおおお！……………」

「じゃあこの作戦は河童たちが全ての道具を用意してくれる三日後に決行する！」

下準備（後書き）

次回は都市に主人公達を侵入させる予定です。

妖怪VS人間(前書き)

投下します

妖怪VS人間

今俺は都市の近くの森の中に名も知らぬ鬼とともにいる。
まあ当たり前だが都市への侵入をするためだ。

はあ…この戦いどっちが勝つことやら…

個人的には妖怪たちに勝ってほしいけどなあ…

でも全滅させてしまった場合別の場所で見つけないと畏れが
なくなるしなあ…

はあ…

「さて…そろそろ行くぞ。」

「わかってるいつでもOKだ」

俺がそういうと鬼は俺を抱えて思いつきり投げた。

…鬼の力ってすごいね…

すごい勢いで都市まで飛んで行ってるんだが…

あ…入れた。

俺は都市のほとんど人もいないようなところに落ちた。
まあちゃんと着地は成功したよ？

そして、俺はすばやく印を結んだ。

「口寄せの術！」

「「「「「うおおおおおー！！」「」「」

なんかかつこいいな…これ

「どうやら成功したようだな…」

「今頃都市のほうでは侵入者は一人だと思い込んでいることだろう」

（監視塔）

どうやらまた懲りずに妖怪が来たようだ。

だが今度は一匹だけだという報告が来ている。

どういうことなのか…命知らずかはたまた一匹だけならはれないとでも思ったのか…

そっいえば今日は娘の誕生日だった。帰ったらちゃんと祝ってやらないとな。プレゼントは何がいいだろう…

「何！？報告では一匹だけではなかったのか！？」

「そ、それが…」

「妖怪と戦って生き残っていた兵士によると一匹どころか妖怪の大軍勢がいたそうです。」

「くっ…」

「どうするんだ！もう捨て駒はいないぞ！？」

「いやまて…ひとつだけ方法がある」

「なんだ？」

「かねてより計画されていた月に移民する計画を実行にうつそう」

「正気か！？」

「失敗すればただではすまされんぞ！」

「我々の命はどうなる！」

「生き残っている住民をかき集めて全員で月に行くんだ！」

「しかし、それでは嗅ぎつけられるのでは！？」

「…兵士にはすまないが…足止めは全兵士にしてもらおう！」

「いいだろう」

「それならいける！」

次々と賛同の声があがった。

………

「終了」

く主人公く

「水遁・水牙弾！」

…次から次へと死んでいく…妖怪が…人間が…

この戦いによつて散っていく…

「水遁・水衝破！」

その威力は凄まじく一瞬で兵士たちを飲み込んでいき辺りに建っている建物を粉々に砕いた。

「死ねえええ！この化物共おおおお！」

「た、たすけ…てく…れ」

「こんなところで死ぬわけにはいかんのだ！」

様々な声が聞こえてきた。

それは人間たちの声だが妖怪たちも同じことを思っているだろう。俺だってこんなところでは死ねん。

ゴオオオオオオ

なんの音だ？

俺がその音のした方を見るとロケットのようなものが飛んで行った。
あいつら…自分達だけ脱出するつもりか…

だが今は目の前のことに専念すべきときだ。
いちいちあんなものにかまっている暇はない。

俺は大量に飛んできた弾丸を奥義で全て返した。

「風遁・神嵐！」

それは兵士達をゴミのように吹き飛ばした。

そして、壁に激突し死ぬものや仲間の武器によって死んだものや弾幕に巻き込まれてもはやただの肉の塊と化してしまったものもいた。

次第に双方とも消耗していき残るは目の前にいる少しの人間とそれを取り囲む随分と数の減ってしまった妖怪だけだった。

なんだろうか…嫌な予感がする。

「やっと…この戦いも終わるんだ！」

そう妖怪の一人が言った時だった。

空から何か降ってくる音がして空を見るとひとつの球体が降ってきた。

俺はあわてて警告しようとしたが時すでに遅し。

「神羅天征！」

…俺だけはなんとか生き残ることはできた。

だが俺以外は全て全滅してしまった…だがまだこの戦いは終わってなどいない。

どこに隠れていたのか次から次へと兵士がでてきて俺を取り囲んだ。俺はゆっくりと空に上がっていった。

もちろんあれをするためだ。

もう気をつける必要もない…仲間なんてもうここには一人もいない。残ったのは洞窟にいる河童と怪我をした妖怪、医者だけだ。

「世界に痛みを…」

そのとき人々は見た。

恐ろしくも神々しい神の姿を…

『神羅天征』

そして、一瞬でその都市は崩壊した。

妖怪VS人間(後書き)

もう主人公に残されたものはほとんどありません

写輪眼と万華鏡写輪眼の力(前書き)

投下します

写輪眼と万華鏡写輪眼の力

虚しいな…

俺は今崩壊した都市を見下ろしている。

そこにはただ巨大なクレーターと都市の残骸しか残っていないかった。

「帰るか…」

俺はゆっくりと歩いて帰ることにした。

〈数日後〉

「…おかえり」

「ただいま…」

「聞いたよ…全滅したんだってね…」

「ああ、もう何も残されてはいない」

「結局お互いにつぶし合っただけ…か」

「これからどうするつもりだい？」

「ああ…これからは各地を放浪してまわることにした」

「そうかい…どのくらいここに居るつもりだい？」

「ふむ…明日の朝一番にここをでるつもりだ」

「それはまた…随分と急だね」

「今回のことで俺にはまだまだ力が足りないことに気づいたからな…」

「じゃあ今夜はゆっくりしていきなよ」

「そうさせてもらいな」

「はあ……」

今俺は風呂に入っている。

ほとんど何も残されていないな……

もう考えるのはやめよう……

余計に鬱になる。

そして俺は風呂からあがり鏡を見て驚いた。

目が写輪眼になっていたのだ。

そして、次に写輪眼とは違う目になりいつもの輪廻眼に戻った。

……どうということだ？

そして、俺はゆっくりと考えた。

そういえば十尾の目も輪廻眼と写輪眼が組み合わさったような感じだったな……

何か関係があるのか……

他にもうちは一族に伝わる石碑は写輪眼、万華鏡写輪眼、輪廻眼の順に解読できるんだっただ……

ということとは……一種の仮説として輪廻眼は元々写輪眼だった？でなければ説明がつかない。

うーん……とりあえずもう一度イメージしてみるか……

「お」

すると発動した。

今度は万華鏡写輪眼を……

ちなみに俺の万華鏡写輪眼はうちはサスケのそれとそっくりだった。

はあ……これってまさか天照とか月読とか使えたりするのか？

ていつかさっきの仮説通りだと使えるってことになるよな…
やってみるか…

「天照！」

叫ぶ必要は特になかったが初体験だし…
すると目の前の鏡が黒い炎を帯びて燃えた。

「どうしたんだい!？」

「…いや、なんか試したただけだけど？」

「?」

「まあ細かいことはいいじゃないか」

「?…まあいいけど」

「それはそうとなんかいらぬ人間いないか？」

実は河童たちはたまに人体実験をするのだ。

あの黒いパールのようなものときも試したっていったし…

「必要なのかい？」

「まあな」

「何に使うかは知らないけど…ほどほどにしときなよ？」

「わかってる」

そして、俺は地下に行きさっそく月読を試してみた。

すると、悲鳴を上げてピクリともしなくなった。

しかも、今気づいたことだが目から血がでていない。

万華鏡写輪眼ってたしか使えば使うほど失明に近付いて使うたびに眼から血がでてなかったか？

…細かいことは気にするなってか…まあ、得をしたんだし別にいいか。

死体処理のために神威も使えるか試したところ…使えた。

…全てが終わった後にこの力が手に入るなんて…とんだ皮肉だな。

もしあのときこの力があつたならあの悲劇を防ぐこともできただろうに…

他にはたしか須佐能乎もあつたよな…

イメージしてみると巨大な人型の骨のようなものが出現し最後に体

をよくわからないもので覆って完成した。

しかも腕が四本でそれぞれの腕に霊器を持っていた。

なにこれチートすぎ。

これほぼ無敵に近いぞ…

いろいろと疲れたし

そろそろ寝るかな…

俺は地下からだと自分の部屋にいきそのまま眠りについた。

写輪眼と万華鏡写輪眼の力（後書き）

主人公は輪廻眼と写輪眼の関係について知らない設定です。ただ写輪眼、万華鏡写輪眼、永遠の万華鏡写輪眼があるということと使い方を知っています。

仙人は旅にでるようです(前書き)

新しい章のはじまりですね！

仙人は旅にできるようです

俺は今、河童たちに見送られている。

「またいつでもおいでよ！」

「達者でな！」

「いつまでも待ってるぞ！」

様々な声が聞こえてくる。

少し感動してきたな…

すると河童の中から特に親しかった医者の河童が出てきて

「これ少ないけど…」

と言って渡してきたのは包まれた三つのおにぎりと一振りの刀だけだった。

「これは？」

「これは私が握ったので…こっちの刀は私達全員で力を合わせて作った最高傑作だよ！」

あかん…今ならムスカの気持ちができるわ…
目から何かがでそうだ…

「最後の最後でお前達…お前達も達者で暮らせよ!」

「「「「「いつでも帰ってこいよー!」「」「」「」

「ああ!またな!」

こんな俺でも…うるうる…
いかん…目から地爆天星が…

俺はそのまま後ろに手を振りながら歩いて離れて行った。

↳ 数時間後↳

腹減った…

そうだ…おにぎりでも喰うか…

俺はすぐ近くにポツンとあった岩に座ると包みをといて食べた。

いやーいいねえ…
思い出しただけで…うるうる…

うーん…森や川も綺麗だしやっぱ自然はいいね！

そして、俺はその場から急いで離れ落下物を避けた。

「？」

それは見ると人の形をした何かだったがどこか懐かしい感じがした。

「いててて…あの馬鹿神め…」

「何だ？お前」

そんなことを考えているときいきなり質問された

「何だといわれてもな…」

「ちょwその眼はw」

「この目がどうかしたのか？」

「それ輪廻眼だろ？」

「そうだが？」

「ってことはお前も同じ転生者か？」

「…どっいつのことだ？」

「俺の名前は工藤巧って言うんだけどな？」

「!？」

「間違っつて死んじまったから転生させてくれるって言われてさあ…」

「お前…今何と言った？」

「間違っつて死「それより前だ」俺の名前は工藤巧「お前本当にそれが名前なんだな!？」」

「それがどうかしたのかよ？」

「お前の通っていた学校は 中学校だろう？」

「何でお前がそれを知っているんだ？」

「俺はその名前の人物を知っている」

そう俺はこいつとまったく同じ名前の幼馴染がいるのだ。
しかもこいつは今何で知っているんだ？と言った。
ほぼ確定的だな…

「じゃあお前は…」

「いいか？いまからある言葉を言っぞ？」

「ある言葉？」

「俺が一時期お前にもものすごくオススメしていたゲームだ」

俺は昔こいつにかなりしつこくオススメしていたゲームがある。
そのゲームは…

「せーの！」

「「オブリ オン」」

「「ヒヤッハー！」」

「ところでお前…神とか言っていたな？」

「ん？あの馬鹿神ね」

「そいつはお前に何かくれたのか？」

「ん？まあな」

「何だ？」

「すべてのポ モンの力だな」

「それはまた便利だな…」

「だろ？」

「あんなことやこんなことが…ククククク…」

「能力名としてはあらゆる奇獣の力を操る程度の能力ってところかな」

「むむむ」

「何がむむむだ！」

「あいかわらず面倒なやつだな…」

「それで？おにゃのはどこかな？」

「おいやめろ」

「あと聞かされていなかったのか？ここはおそらく太古の時代だぞ

「？」

「な…なんですとー!?!」

「はあ…」

やっぱり聞かされていなかったのか…

こいつは俺の幼馴染だ性格は把握している。

こいつなら幻想郷のある時代に飛んでいたはずだ。

「なら時間を操って未来に行けばいいんじゃないか？」

「そんなんじゃないじゃつまらないじゃマイカ！」

「どつちだよ…」

「まあいい…それじゃさっそく太古の時代とやらを満喫させてもら
うとしますか！」

「と…」

「何だ？」

「じじっつじじっ」

「まずはそこから…」

「ここは月の民が月へ移民した直後の時代だ」

「ちょうどここから十キロほどいったところに未来都市の残骸がある」

「残骸？」

「…」

こいつはなんとなく察してくれたようでこれ以上は聞いてこなかった。

こいつはこんなふうがいいところもちゃんがあるやつだ。

まあ…たまに息をするように嘘をつくけどな！

「で…これからどうするんだ？」

「俺はこれから各地を放浪してまわるつもりだが……」

「お前は？」

「俺は……お前についていくのぜ」

「……頼もしいな」

「じゃあ改めて出発だ！」

「おう！」

仙人は旅にできるようです（後書き）

まさかの新キャラ登場！

本当は嘘をつく程度の能力とか考えてたんですけどね…球磨川の能力に近いが違うところは…すべてを生み出しすべてを消しさる全能の力だということです。

他にもありとあらゆるものを召喚し使役する程度の能力とか…

自然を操る程度の能力とか…

どなかひとつでも持っていれば世界を滅ぼしかねない能力ですけどね…

あなたならどうしますか？（前書き）

投下します

あなたならどうしますか？

あれからかなりの月日が流れた…
今俺達とはある山にいる。

なんだか知らないが急に巧…じゃなかった匠が山に登ろうと言いだしたのだ。

まったく…こんな山登って何になるんだ…
あと匠つてのは幼馴染が改名した名前だ。

「おいイ？顔にでてるぞ？」

どうやら考えていたことが顔にでていたようだ。
そうして登っているうちにやっと頂上についた。
匠はちょうど突き出している岩に乗ると

「フタエノキワミ、アッー！」

と大声で叫んだ。

「何しとんねん！」

俺が突っ込むと

「いや、だってこんな時代じゃないと思いつきり叫べないだろ？」

「それはそうだが…」

だいたい時代がどうかそれ以前の問題な気がするの俺だけか？

「はあ…」

俺がため息をついていると急に目の前の空間が割れた。

「うん？」

俺は疑問の声をあげただけだが

匠のほうは何かを期待するような目でその割れ目を見ている。

すると…

「はじめまして」

という声とともに中からあきらかに場違いな…というより時代にあ
っていない服装の少女が現れた。
どこかで見たような…

「ヒヤッハー！美少女だー！」

「やめい！」

「…」

歓声を上げる匠とそれを止める俺、そしてその様子を割れ目から上半身だけだしてポカーンとした様子で見ている少女。

「シユールだ…」

「で？何のようだ美少女」

「悪いけどあなたたちには能力の実験台になってもらうわ…」

という声とともに俺達の足元に割れ目ができた。
なんだか割れ目って卑…ゲフンゲフン

「…だが断る！」

俺は神威で匠はおそらく空間を操ったのだろう。
それぞれ現れた割れ目を消した。

「なっ!？」

よほど能力に自信があったのだろう。
かなり驚いていた。

「さうて…ちょーっとお話ししようか？」

「い、いやあああああああ!！」

その日、とある山にて一人の少女の絶叫が響き渡ったという。

「ゆ、ゆるひてえ…」

今俺達の目の前には放心状態で目からは涙を流しだらしくあいた口からは涎をたれながしたまま死んだ魚のような目をした少女がいる。

まあ、何をしたのかというと月読を使って72時間刀で刺され続ける幻を見せたり…魔幻・奈落見の術をかけたらしい。そうしたらこんな状態になってしまったというわけだ。

こんな状態にしておいて何だが精神が元に戻るまでちょっとした間面倒を見ることにした。

まあ、一生もののトラウマだろうけどな…

それに面倒をみるとは言っても本当にちょっとだけなのでちょっと寝かせてすぐに出て行ってもらうつもりだ。

鬼畜だな…

まあ、もとはと言えば仕掛けてきたのはこの少女なんだし…

その後俺達はその少女を連れて山を下り俺が木遁で作り出した家に行った。

今俺達の目の前には寝ている少女とそれを危ない目で見ている匠、そしてその様子を見はっている俺とかなり困った状況になっている。

「フヒヒ…」

「おい、完全に危ない人になっているぞ」

「まさかとは思つが…そんな少女を襲うつもりじゃないよな?」

「フヒヒ…」

だめだコイツ…早く何とかしないと…

「ヒヤッハー！」

と言つてルパンダイブしようとしたので腹にパンチを食らわせて吹き飛んだところを>ちなみに俺は金剛力を持っているので滅茶苦茶

力が強いく痛天脚で止めを刺した。

最初のパンチで山を貫通し1000mほど吹き飛び痛天脚で大地が真つ二つになり匠はそのまま地面に思いっきりめり込んでいる。それでもピクピクと動いているのでその生命力の高さに驚かせられる。

「まったく…」

俺が戻ると少女は未だに寝ていた。
どうしたものか…

あなたならどうしますか？（後書き）

どうでしたでしょうか？

いまさらですが主人公の見た目は黒髪、目は輪廻目で人によってはイケメン、人によっては普通という感じですね。まあ至って普通ですね。

常に無表情なのが特徴です。

匠は碧色の髪に碧色の目のイケメンですね。

まあ名前と容姿に関してはマイ クラフトをたまたま見ていたのでこうなりました。

この少女はおわかりでしょうか…紫です。

ですが生まれたばかりの紫という設定です。

今回は過去の戦いを書こうと思います。

言えない…実は入れるのを忘れててこの話を投稿したあとに気づいたなんて言えない…Orz

親方！空から十尾が！（前書き）

投下します。本当なら前回の前に何話か入る予定だったのですが……
すっかり忘れていたので過去の話が何話が続きます。
前回の前回から数年ほどしか時間が経っていません。
今回は主人公強化イベントですね。

過去話が何話が続いてその中に主人公強化イベントが混じってる感じ
です。

親方！空から十尾が！

今日も平和だなあ…

今日も空が晴れていてとても平和だと感じた。

あれが空から降ってくるまでは…

「なあ…とところで今どこらへんだと思うっ？」

「さあな…」

この世界で生前の地図が通用するのかと言われれば自信がない。
ましてや今はかなり大昔の時代だ。

何がどこにあるかなんてわからない。

今、俺達は太陽の光が降り注ぐなか歩いている。

どこを見ても山、山、山…山ばかりだ。

今は山と山の間にある道（笑）を通っている。

「はあ…」

「何かこうあっ！と驚くようなことはないのか…」

そんなことを言われてもな…

俺は芸人じゃないしあっ！と驚くようなことなんてできない。

>天の声：いやいや地爆天星とか神羅天征とかあるだろ。忍術の火遁とかまさに一発げ「豪火滅却！」ぎゃあああああ…<

「今何か聞こえたような…」

「おいおい暑さで頭がおかしくなっただんじやないだらうな？」

今の声は気のせいだったのか…

これは本当に頭がやられてきてるかもしれないな…

「はあ…空から女の子でも降ってこないかなあ…」

「あつ！親方！空から女の子が！」

なんてくだらない冗談を言ってみる。
匠を見てみると空を凝視していた。

「おいおい冗談だって…まさか本気に…」

いくら話しかけても空を見たまま動かないのでぶん殴って引きずって行くのかと考え始めたときだ。

いくらなんでもおかしいので俺も空を見てみることにした。

すると空に小さい点のようなものが見えた。
それはどんどん大きくなっていきしまいには俺達を押しつぶさんばかりの巨大さになって…

「うおおおお！？」

俺は正直パニック状態だったが慌てて神羅天征を発動させた。

すると空から降ってきた物体を弾き飛ばした。

その奇妙な物体はもそもそと動き尻尾が生えた。

なんだかどこかで見たことのあるような…

尻尾は十本生えていて…何とも言い難い姿をしていた。

…ただ一つ言えることは間違いなくあれは恐怖の権化であるということだ。

それに俺に似た力を感じた。

匠のほうはというと

「あれって…十尾のシルエットにそっくりなんだが？」

とか言っていた。 >天の声：これはあくまで自分の妄想なので実際の十尾がどんな姿をしているのかは知りません。なのであえて姿を書きませんでした。 <

「十尾…」

どこかで見たことがあると思ったならそういつことが…
しかし何であんなものがこの世界に…

どちらにしろあれを倒さなければ今までの生活はもつてできないだろう。

というより冗談抜きでやヴぁい力を感じる。

「おい」

「何だ？」

「どっするっ…」

「どっするって…そりゃお前、封印するしかねえだろ」

「ですよねー」

とは言ったものの…マジでどうするんだコレ…

するとその化け物は俺達を見つけたらしく凄まじい雄叫びを上げ突進してきた。

というより本当に化け物だなコイツ。

雄叫びだけで近くにあった山が吹き飛んだぞ。

俺は須佐能平を発動させ身を守り匠はよくわからないバリアのよう

なものを張っていた。
てかこの化け物…とんでもない馬鹿力だな。
須佐能乎がどんどん押されている。

その化け物は

いきなり須佐能乎の両腕をつかむと顔をかなり近くまでよせ何かを溜め始めた。

何か嫌な予感が…

するといきなり化け物の頭が横に思いつきりそれた。

と思ったと同時に今まで溜めこんでいたそれが放出され化け物の眼前にあつたものが消し飛んだ。

俺は今がチャンスとばかりに須佐能乎を動かし思いつきり化け物の腕を叩き斬った。

化け物は凄まじい叫び声を発したが俺はおかまいなしに天照を発動。化け物はたまらず地面をのたうちまわっていたが俺をその恐ろしい眼で睨みつけ俺に飛びかかってきた。

「どいつもこいつも俺のことを忘れちゃいねえか!？」

すっかり忘れていたがおそらくさっき化け物の頭を逸らしてくれたのは匠だろう。

そして、化け物VS怪物（人の形をした何か）の戦いがはじまった。

まず最初にあいつは化け物の周りをぐるぐる飛び回っていたが化け物に捕まってしまいそのまま潰されてしまうかと思ったところでは

きなり口から凄まじいエネルギーを発射し化け物の顔面に直撃させた。

そして、化け物が顔を押しさえているところを顎を蹴りつけ体当たりをした。

だが、当然ただの体当たりではない。

よくはわからないが何かを纏っていたらしく凄まじい勢いで化けものは吹き飛んでいき数キロも吹き飛んだところでやっと止まった。

化け物を見ると腹から血が噴き出していた。

あんな攻撃をする匠もすごいがあんな攻撃をつけて血を出すだけで済む化け物もすごい。

だがかなりあいたと思われるこの距離を利用して化け物はまたあれを…あれはなんだったか…び…び…そうだ！尾獣玉だ！

その尾獣玉を溜めそして、発射した。

当然俺は盾で防ぎ、匠は化け物の後ろにテレポートしていた。

そして、またあの謎の体当たりをして化け物がこちらに吹き飛んできた。

俺は飛んでくる勢いを利用して剣を突き刺そうとしたがあいつは信じられないことに空中で体勢を整え俺の剣を微妙に身をよじり避けた。

なんてやつだ…

まさかこいつ…人間並みの知能を持っていたりするか？

だが一時はどうなるかと思つた戦いも匠の撃つたエネルギーを極限までためた超極太の光線が化け物に直撃し俺がそのすきに剣を突き刺し封印したことで終わった。

だが、この化け物は封印されながらも抵抗していたのでかなりびびつた。

本当に封印から抜け出しかけたこともあつたのだ。

まったくそれにしても…この化け物…どうしよう…

親方！空から十尾が！（後書き）

どうでしたでしょうか？

次回はまた違う過去の話です。

ていうか今気づきましたがああ、あの弓が全然活躍していないという…

まあ、個人的な意見ですが、化け物と怪物の戦いなんて案外あっけないものだと思いますよ？

十尾の残り滓（前書き）

今日は登山してきたんですが…フラグのバーゲンセール状態でしたw
登るときに十本。帰るときに二十本近くフラグが立ちました。
主に死亡フラグでしたけどねw

自分にあえてフラグをたてつつそのフラグをへし折りましたw
帽子がなければ即死だった…

タグがつくとすれば

「レジワロス」

「ブロンティスト」

「危険が危ない」

「親方！空から男の子が！」

「その石で私と勝負するつもりかね」

「パルス！」

「あれが後のラピユタだ」

「もうやめて！とつくに足のライフはゼロよ！」

「見る！人がゴミのようだ！」

「死亡フラグのバーゲンセール」

「帽子がなければ即死だった…」

「まずは落ち着け。話はそれからだ。」

とかですかねw

十尾の残り滓

まったく…あれから散々な目にあつた。

十尾を俺に封印するときだが十尾は最後まで抵抗した。

それと十尾と戦ったときに十尾が発した邪悪なチャクラが少し漂っている状態なのだ。

もしあれが妖怪なんかには形を変えたらどうなるか…

はあ…

もちろん封印は成功し俺はさらなる力を手に入れることができた。

これって完全に六道仙人だよな…

今は十尾と戦つたところに向かっている。

「嫌だなあ…行きたくないなあ…」

「そんなことを言うなよ」

こいつはずつとこんな調子で行きたくないと言っている。
なんだか嫌な予感がするようだ。

「…」

「…」

何かいた。

黒いアイツとしかいいようがないな。

いや…別にGとかではない。

ただ本当に黒い。

どんなやつかというのと千と千の神隠しに登場したなしのような
かんじだ。

するとこつちを見た。

「こつち見んな」

「……！」

するとわけのわからない言葉を発しながら>>というかあれが言葉な
のかどうかすら疑わしいが<<こちらに突進してきた。
しかも滅茶苦茶速い。

匠は

「こつちくんな！」

と言いながら逃げに行った。

「……」

「…」

残ったのは俺と なしだけだ。

これからは黒いアイツと呼ぶことにしよう。

はつきり言ってこんなやつを相手にしたくない。

というより触れただけでアウトな気がするのは俺だけか？

しばらく俺と黒いアイツとで見つめ合うというシユールな時間が続いた。

黒いアイツが俺に突進しようとした瞬間、空から隕石が降ってきた。そして、それは見事に黒いアイツに命中し黒いアイツは悲鳴を上げた。

「 …… 」

何か言っているようだがまったくわからない。

というよりわかりたくないな。

おそらくさっきの隕石は匠の仕業だろう。

とりあえず汚物は消毒するにした。

もちろん天照だ。

さっきからわけのわからない奇声を発しているが同情できないのはあいつが獣のように襲い食らうことしか能の無い生物のように見えるからだろう。

俺は妖怪が大好きだ。
俺は妖怪が大好きだ。

大事なことなので二回言った。

だが、俺が好きなのはあくまで普通に接することのできる妖怪であり獣のように理性がない妖怪は好きではない。
むしろ他の妖怪にも迷惑がかかるだろう。

そんなことを考えているとあいつはいつのまにか体勢を立て直しさつきまではのたうちまわっていたがこちらを見ている。
そして、また突進してきた。別に相手をする必要もないのでこのまま天照で燃え尽きるまで逃げ回ることにした。

だがさつきも言ったように黒いアイツは滅茶苦茶速いうえに生命力がまさにG並みだった。
俺はかなりの速度で走っているにもかかわらず黒いアイツはどんどん距離を縮めてきた。

まったく…それにしても匠はどこまで逃げたのだろうか。
まったく感じられないのだが…

俺はまた走る速度を上げた。
すると黒いアイツも速度をあげた。
…もしかしてこれってどんどん強くなってる？
どうしてこうなった…

俺は猛スピードで走っているが黒いアイツとの距離はどんどん縮ま
っている。

「……………」

また何か言っているようだ。

というかアイツおかしいだろ。

天照で燃やされながら追ってくるとか…

考えても見てほしい。

なしが四足歩行で猛スピードで泥のようにくちゃくちゃな身体を
揺らしながら迫ってくる様を…

考えただけでゾツとする。

いつまでも逃げていても埒が明かれないと思った俺はそのまま空に上
がり神羅天征で押し潰すことにした。

「神羅天征」

すると凄まじい勢いでクレーターは広がっていった。

「やったか…」

なんかフラグを建てた気もするが…
するといきなり頭を掴まれた。
黒いアイツだった…

「馬鹿な！神羅天征に耐えるだど！？」
もちろんまだまだ本気ではないのだが…

俺はそいつの手を掴むと顔面を殴った。

そいつは奇声をあげて後退したがすぐに俺に掴みかかってきてそのまま投げ飛ばされた。

投げ飛ばされた俺は凄まじい勢いで吹き飛んでいき岩の壁に激突し、その衝撃で岩が崩れ俺は下敷きになった。

まさかあれまで使うことになるとはな…

「地爆天星」

黒いアイツは口から泥の塊のようなものを吐き出してきたが俺はそれを跳ね返した。

すると黒いアイツは吹き飛んでいき俺はそのすきに黒いアイツを岩で団子状態にした。

今ではこの程度の大きさなら簡単に作れる。

そして、黒いアイツも地爆天星に巻き込まれた。

今度こそ終わったな。

すると

「いや〜おつかれ〜」

と匠がどこに隠れていたのかでてきた。

「お前は何もしていないだろう!」

そうだ。こいつは何もしていない。

「最初に隕石をぶつけたじゃマイカ」

「それだけだろう!」

「細かいことは気にするな(キリッ)」

匠はキリッとした顔で言った。
むかつく…

「何がキリッだ!」

俺は空に浮かんでいた地爆天星をそのまま匠に落とした。

十尾の残り滓（後書き）

どうでしたでしょうか？

なんだかパクリな気もしますが気のせいですよ？

気のせいですよ？

大事な事なので二回言いました。

愚か者(前書き)

投下します

愚か者

「起きろ」

俺が寝ているとそんな声が聞こえてきた。

「…あと五分…」

とりあえず適当に返事をすることにした。
だが当然、匠にそんなことが通用するはずもなく。

「はあっ!」

「ぐへっ!?!」

いきなり腹に衝撃がきて変な声が出てしまった。

「…殺す気か!」

「ちっ」

舌打ちしやがったこの野郎…

「あらぶる匠のポーズ！」

匠を見るとすごく…シユールです…といいたくなるようなポーズをとっていた。

嫌な予感がするんだが？

「だ・い・ば・く・は・つ」

「…」

その瞬間大爆発が起きた。

まさに大爆発。

一瞬で洞窟は消し飛び周囲にあったものを飲み込んだ。

「どうしてこうなった…」

周囲を見てみると見渡す限り焼け野原。何も残っていなかった。

「ヒャッハー！」

だいたいコイツのせい

「はあ……」

とは言っても俺のせいでもある。
はあ……

一方、月では議会が開かれていた……

く月く

「あいつらは駆逐するべきだ！」

「馬鹿な！ 忘れたか？ 奴の力で都市は一瞬で崩壊したんだぞ！」

「今はあのおとき以上の技術がある！」

「無理だ！ 無理に決まってる！」

御覧の通りの有様である。

「おやめなさい」

「しかし—！」

「二度目はありません」

「…」

「しかし月夜見様…」

しかしこの月の都の王である月夜見の登場によって議会は落ち着きを取り戻した。

「私達にはあのと看とは比べ物にならないほどの力があります。何を取り乱すことがあるのです」

「しかし、相手はあの六道仙人と名乗る化け物ですぞ！」

「しかも匠とやらは地上を監視している監視者と目を合わせるとい

「離れ業をしたと聞いたが…」

「そして、我々を一番驚愕させたのが…」

「十本の尻尾の生えた化け物の消滅…」

このとおり主人公達を監視していたのだ。

そして、十尾を倒した主人公達にたいして驚愕した。

しかも匠に至っては監視者とモニターを通して目を合わせたりしていた。

主人公も気づいてはいたがあえて無視をしていた。

それだけ今の主人公達にとっては月の民などどうでもいい存在なのである。

「そうですね。…しかし倒せないこともないでしょう。」

「まさか…アレを使う気では…」

「アレを使う以外にあの者達を倒す方法などないでしょう」

アレというのは破壊爆弾で破壊のみを目的とした現時点での月の都で最も破壊力のある爆弾である。

その威力は地表に存在するものを全て一掃してしまうほどである。

「では採決を…」

「私は賛成だ」

「私も」

「私もだ」

と続々とこのことに賛成する者がでた。
というよりこうする以外にどうすればいいのかわからなかったのだ。
そうして主人公達のいる地表に向けて爆弾が投下されることが決定した。

「終了」

「六道仙人」

まったく…
あれはなんだ？

そのとき仙人の目には球体が空から降ってくる光景が映っていた。

「あれは…」

匠も気がついたようでアレを見つめている。

「爆弾だな…」

どうやって判断したのかわからないがどつちやら爆弾のようだ。
犯人はおそらく…月の民だろう。
あいつら以外思いつかないしな。

「じゃあ…」

「ああ、送り返しとくか」

「いや…俺がいくぜ！」

匠はそう言つと空を飛び爆弾を回収するところかにかに消えた。

く匠く

まったく…あいつらも懲りない奴らだなあ
監視するだけなら見逃してやったのに…
ちなみに今は月の都にいる。

まあ返却するためだ。

ゴミは自分たちで処理しろってな

「はじめまして」

「うわっ何だお前は！」

「匠だ！匠がでたぞー！」

「落ち着け！」

「それは何だ…爆弾だー！」

「落ち着きなさい！」

「へえ〜…あなたがねえ…そんなもので姿を隠す必要なんてねえだ
ろ」

「…」

「何のよつで…」とぼけてんじゃねえよ」

「殺されてえのか？」

「監視するだけではあきたらず爆弾投下なんてなあ…」

「できればその爆弾を外にだして欲しいのですが…」

ちなみにこの場合の外とは月から離れた宇宙空間のことである。

「すんませ〜ん、無理」

「じゃあここに置いてくからあとは自分たちで何とかしてくれよ〜」

そうして匠は月から去った。

「誰か！」

「爆弾処理班を！」

「急げ！」

「終了」

「六道仙人」

どうやら帰ってきたようだ。

「どうだった？」

「ちゃんと置いてきたぜ」

「そうか」

はあ…

なんだかなあ…

愚か者（後書き）

次回からは過去ではなくちゃんと時間が進み始めます

傲慢（前書き）

投下します

傲慢

「暇だな」

「暇すぎる…」

今俺達は野原にいる。

もう…うん、草が生え放題、伸び放題で大変なんだよ。

飛ばばいいんだが…なんだかなあ…

とりあえず当てもなく適当に歩いているだけだ。

そのうち何とかなるだろうということだ…

最近はずんじゆんと神々がもめているらしい。

何でも大和の神々がほかの神々の領地を侵略しようとしているらしい。

俺ははっきり言うと漁夫の利を狙っている妖怪たちの方が心配だ。

「あれは…」

そんなことを考えていると集落のようなものが見えてきた。
すごく…古いです…

「ふむ…」

誰かは知らないが何者かの力を感じる。

神の持つ力は他の力を遥かにしのぐほど強力だ。

別に悪いことをしにきたわけではないので普通に入ることにした。

その際になぜか匠が危ない目をしていたのは気のせいだったのだろ
うか…

しばらく歩いていると大きな建物がありちよつど数人ほどの集団が
その中に入っていくところだった。

「ついていつてみようぜ」

「しかし…」

「別に罰が当たるわけでもないし」

「いや、あたるだろ」

「細かいことは気にするなって」

結局見に行くことになった。

はあ…

俺は押しに弱いんだ。

昔は何をしても弱そうだと言われたものだ…

「……の生贄……でございませう」

生贄という何とも物騒な言葉が聞こえてきた。

そのまましばらく待っているとき、さっきの集団はでていった。

「さっさとでてきたらどうだい？」

「ほう…」

「…」

「まずはさすが神だと褒めておこつ」

「あんたみたいなのに褒められても嬉しくとも何ともないよ」

「ふん」

なでなで…

「!?!」

匠はと言うと気がつくといつのまにか諏訪子を膝に乗せた状態で頭を撫でていた。
神のほうはじたばたと抵抗していたがたいして嫌がっていないように見えるのは俺の目がおかしいからだろうか…

「離せ」

「だが断る」

「知ってるか？」

「？」

「とある神士は言った」

「ロリコンが幼女を愛でるのではない。幼女を愛でるのがロリコンなのだ」

つまりこの変態は何が言いたいんだ…

「まあ頭の片隅にでも置いておけ」

「ところであんたたち妖怪じゃないのかい？」

「俺達が妖怪？」

「どこをどう見たらそうなるんだ？」

「うーん、そうだよね…」

「お前はいい加減その手をどけたらどうだ？」

といつとなぜか神のほづが先に反応しわずかにこちらを睨んだ気がした。

どうなっているんだ…

「ところで噂で戦争が起きると聞いたのだが…」

「ああ、大和の神がね…」

「ということとは…」

「協力してくれるのかい？」

すると匠が

「俺は協力するつもりだけど…お前はとうするんだ？」

と言ってきた。

「俺はどちらにも協力するつもりはない」

「じゃあ中立ってか？」

「まあそうなるな。俺は参戦せずにのんびり眺めさせてもらうとして
よ」

俺は戦争なんぞ好きではない。

まあ、参戦するのは嫌いだが見るのは嫌いではない。

それに何と言っても歴史に名を残す神々の戦いだからな。

見ても損をすることはないだろう。

そして、俺はそのまま建物をでた。

〈数日後〉

今俺は匠と話している。

何を話しているのかと言うと

なぜか大和の神々と話し合ってきてほしいと言われたそうさ。

まあ、ようするに交渉だが…悪く言えばパシリだな。

俺も同行することにした。

まあ、中立とはいってもただ単に観戦するだけじゃつまらないしな。

それに諏訪の神とも会っているんだし別に直接会いに行っても問題はないだろう。

しかし、何だろうか…すごく嫌な予感がする。

そもそも神というのは強大な存在である。

だがそうであるがゆえに傲慢な存在でもある。

だから心配なのだ。

もしかしたら話し合いにすらならないかもしれないし運が悪ければそのまま戦闘になるかもしれない。

どちらにしろ碌な事にならないのはたしかだろう。

…いつのまにか目的地に着いていたようだ。

「すみませーん、誰かいませんかー？」

すると

「誰だ？」

中から一人の女性がでてきた。

「あ、どーも。諏訪の神に頼まれてきた使者ですけどー」

匠はさっきからなめた発言をしているが無視することにした。

「ああ、そういうことか。中に入れ」

そうして案内されること数分。

とある部屋の前に来た。

すごく…大きいです…

まあ部屋の入り口というかドアというか…

気にせず開けるとなんだかなあ…

あからさまに喧嘩腰な気がするんだが？

だって殺気ぶつけてきてるし…

他にも何人か神がいたがそのなかで若そうな奴が殺気をぶつけてきていた。

匠のほうを見ると早くも顔がびくびくしていた。

仮にもこれは話し合い（笑）…交渉である。

手がすべってうっかり偶然にも神を殺してしまうのを我慢しているのだろう。

他の神もそれにたいしてまったく注意していない。

こいつら本当に話し合う気があるのか？

「おい人間」

「生意気だぞ床に正座でもしてろ」

するとくすくすと笑い声が聞こえてきた。

匠の方を見ると

「（# ^ ^）…」

こんな感じだ。

あとひと押しで誰かが犠牲になるかもな

「それで？何の用だ？」

「豚のような悲鳴をあげる！…！」

あと少しで死にそうだというときに俺はそいつを助けてやることにした。

見ると四肢は引きちぎられ腸を引きずり出された状態だった。まったくこんな状態でよく生きているなと感心した。

匠は

「おいおい、止めるなよ」
と言っていた。

他の神はと言つと

「何と…」

「惨い…」

と言っていた。

この程度で惨いとか言ったらまるでお話にならないな。

まったく…俺は適当に術を施してやるとそのまま帰った。

傲慢（後書き）

とりあえず次回は諏訪大戦になる予定です。今回はグロシーンが入ってましたね。

まあ、ほんのちよつとでしたが…

あと話の展開が少々強引な気もしますが気にしないでください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8782x/>

東方仙人伝

2011年11月3日02時06分発行